広報 やまこし

1980 5月 第143号

■発行／新潟県古志郡山古志村役場　電話（025859）2331　■印刷／大川印刷株式会社　■毎月1日発行

人口の動き（55.3.31現在）

■人口 3,654（−54）　男 1,817・女 1,837　■世帯数 923（−14）

■3月中のうごき　□出生 5　□死亡 2　□転入 18　□転出 75

お知らせ

5月8日（木）春の消防演習

9時のサイレンを合図に

五月八日（木）に、村の消防団による春季消防演習が行われます。午前九時のサイレン・半鐘を合図に、各分団ごと、万一の火災から住民を守るため、機械器具の点検や放水訓練が実施されます。

今年は遅くまで雪が残り、今が火災の起こりやすいシーズン。空気が乾燥し、これくらいと思うような小さな火でもすぐに大きな火災に結びついてしまいます。

たばこ、たき火など特に注意して、火災が起こらないよう心がけてください。

栄養指導車

保健所の栄養指導車「ゆうきゅう号」が来村し、健康づくりのための食生活改善指導が行われます。となり近所おさそい合わせて多数おいでください。

期日	会場	時間
5月7日（水）	中道屋商店前	10:00〜11:30
	下村公民館前	13:30〜15:00
5月8日（木）	竹沢農協前	10:00〜11:30
	桂谷三叉路	13:30〜15:00
5月9日（金）	民俗資料館前	10:00〜11:30
	大久保神社前	13:30〜15:00

国民年金

昭和55年度 保険料の免除申請受付

国民年金は私たちの老後の幸せを願って生まれたもので、個人が納める保険料と国のお金でまかなわれています。

しかし、所得がなかったりして保険料を納めることができない方には、保険料を免除する制度があります。この免除を受ければ、昭和五十五年度の一カ年分の保険料を納めなくても、年金の期間にアナはあきません。

ことしも次の日程により、保険料の免除申請を受け付けますので、希望者は忘れずにおいでください。

なお、当日都合で申請できない方は、二日以内に役場住民課で申請してください。

申請期日　五月二十日（火）
申請場所　役場住民課年金窓口
持参品　印鑑

※ 免除申請されても、所得額や固定資産の評価額などにより、保険料が免除されない場合があります。また、昨年免除を受け、今年も免除を受けようとする方は、再び申請しなければなりません。

住宅金融公庫

住宅資金の申込受付

〜融資額が上がりました〜

受付期間……五月二十日まで
選定方法……先着順で無抽選
対象住宅……自分が住むための住宅の新築で、住宅部分の床面積が一二〇㎡以下。ただし、六十歳以上の老人、心身障害者、六人以上の家族が同居する場合は一五〇㎡以下。
融資額……木造（八〇㎡以上）の場合四一〇万〜四三〇万円。断熱構造化一〇万〜三〇万円、太陽熱温水器設置一〇万円、老人（六十五歳以上）等が同居する場合五〇万〜一五〇万円の割増し制度があります。
利率……年五・五%
返済期間……木造は二十五年以内
申込場所……県内の「住宅金融公庫業務取扱店」と表示した金融機関

※ 詳しくは公庫北関東支所（〒〇二七二一32—六六五五）または公庫業務取扱金融機関へ。

ご協力ください

村道の測量を行います

昭和五十三年より始めた村道測量を再開します。これは、一八三キロメートルある村道の全部について、正確な現況を知るために、測量会社に委託して行っているものです。

測量の際は、みなさんの所有地に立ち入らせていただくこともありますが、ご了承をお願いします。また、打った「測量ぐい」は絶対に動かさないようご協力ください。

（建設課）

村職員の移動

○退職（三月三十一日付け）
坂牧　登米吉（総務課）

記事の訂正

四月号六ページ・**村史編集メモ**三段五行目……「うらせ」は「うら女」の誤り。

八ページ・**角突き日程**の虫亀会場……「8月10日」は「**8月13日（水）**」の誤りでした。お詫びして訂正します。

村の人口を考える

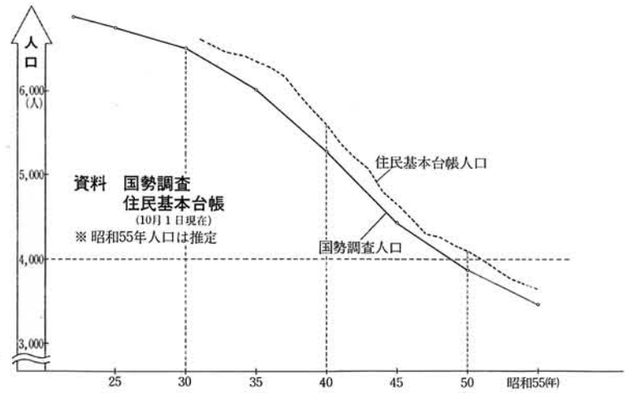
ことしは国勢調査の年

昭和55年 ― ことしの10月1日には、全国いっせいに国勢調査が行われます。

この調査は、国内に住んでいるすべての人を対象とした、国の最も基本的で規模の大きな統計調査です。大正9年〝文明国への仲間入り〟を合言葉に初められて以来、5年ごとに行われ、今年は13回目に当たります。

ところで、この国勢調査の「国勢」は「国の勢い」ではなくて、「国の情勢」である ― つまり、国の情勢を調査するものだといわれています。しかし村として考えると〝山古志村を支えている人口はどんな年代で、何人いるのか〟ということがわかるわけです。「村の情勢」＝「村の勢い」ともいえるのではないでしょうか。

そこで今回は「村の人口」について、国勢調査と住民基本台帳から考えてみましょう。



〔表―Ⅰ〕 人口の推移

山古志村誕生後23年間で 2,893人 43.7% の減少

山古志村誕生直後の昭和三十一年十月一日の住民基本台帳人口は六、六一三人。それが昭和五十四年十月一日では三、七二〇人。二十三年間で実に二、八九三人、四三・七%もの減少となりました。

国勢調査でみても、人口のピークだった昭和二十二年と昭和五十年を比べると、二、九八〇人、四三・三%の減少です。

これらが〔表―Ⅰ〕のように、急な右下りの線となって表われています。

人口の動き

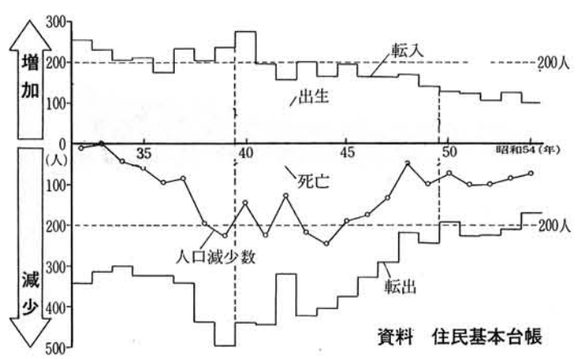
では、人口がどのように減少したのか、その動きをみましょう。

人口は、出生・死亡の自然増減、転入・転出の社会増減により変動し、その動きを表わしたのが〔表―Ⅱ〕です。これによると、昭和三十八年から四十七年の十年間に最も人口が減っています。

自然増減では、昭和三十六年まで出生が死亡の二倍程あったものが、昭和四十三年以降はトントン。つまり自然増はなくなっています。社会増減では、転入・転出は昭和四十年以降は減少していますが、人口が最も減少した時期は転入が転出の二倍もあり、人口の減少は、出生の減少と転出の多いことが要因になっています。

最近は人口減少傾向は少なくなってきたといわれています。表をみても確かに昭和四十八年以降は落ち着いてきているようです。しかし、出生・死亡による自然増はほとんどなく、転出は依然として転入の一・五倍以上あり、毎年百人程度の人口が減っているのです。

〔表―Ⅱ〕 人口動態



55年5月5日 こどもの日

保育所の5歳児 ―― 49人

55年国調人口 三、四七二人に

予測

今までの国勢調査と住民基本台張の人口から、十月に行われる昭和五十五年国勢調査の人口を予測してみました。

予測の結果、三、四七二人となりました。昭和五十年からは四二四人、一〇・九%の減少。毎年八五人ずつ減った勘定になります。

昭和五十三年に皆さんに配布した『活気ある村をつくる』で予測された最悪のケース三、六九二人より二二〇人も低い数です。予想したよりはるかに早いペースで人口が減少しています。

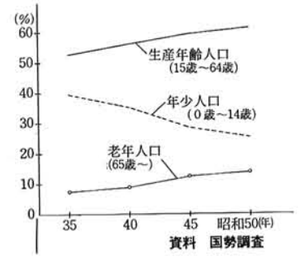
人口の老齢化

人口減少について、もう一つ大きな問題があります。それは人口の老齢化ということです。

〔表―Ⅲ〕のように、年少人口が減り、老年人口が増えています。年少人口の減少は、若い人が少なくなったこと、一人の母親の生む数が少なくなったことにより

ます。また、老年人口比率は、昭和五十年で県平均の一・四倍。これはお年寄りの数が増えたということより、転出により若い人が少なくなったことによるものです。

〔表―Ⅲ〕人口比率



実は、このことが将来の人口に大きな意味をもってくるのです。

若者をとどめる

主に若い人が転出する、生まれてくる子供が少なくなる――山古志村の人口をこうした原因で減少してきました。その結果、お年寄りの比率が上がったのです。

しかし、将来の山古志村の人口を考えるとき、若者の減少はどうしてもくい止めなくてはなりません。昭和三十年代前半に生まれた子供（現在二十歳前後）は毎年一〇〇人を超えていました。それが減り続け、昭和四十三年には六〇人を、昭和五十年は五〇人を割って、昨年は三〇人しか生まれていません。絶対数が少ないのです。この少ない若者を村に留める、これが村を活気づけるための最大の課題でしょう。

若者が増えれば、その若者が結婚することにより生まれてくる子供の数も増える――そして人口減少がしだいにおさまって、健全な人口構造が期待できます。

若者が村に定着することが先決問題、といっても簡単なことではありません。雪の克服をはじめ、生活環境の整備、産業の振興などの問題が山積みされています。

お互いの家庭においても、また地区においても、みんなで真剣になって、明るい村の未来のために考えていきましょう。

虫亀地内で大地すべり!!

四月九日午前四時十五分頃、虫亀・滝之林地内で大規模な地すべりが起こり、村民を驚かせました。幸い人家に被害はなかったものの、被害面積二〇ヘクタール、特に生活の大動脈である県道が切断され、早い復旧が待たれています。

「雷だと思って目が覚めた。外へ出てみると土が象の群れみたいに動き、ピチン！ピチン！と木の根が切れる音がし、思わず身体に寒けがきた」（土砂が家のすぐわきを通った田中ミキさんの話）。

山の斜面から崩れた七五万立方㍍の土砂は長さ一㌔㍍以上にわたり、その様子は氷河のよう。被害面積は、田畑三・二㌶をはじめ二〇㌶あまりになっています。さらに虫亀と竹沢を結ぶ県道柏崎高浜—堀之内線が一五〇㍍にわたり分断され、被害総額は、推定で六億四、〇〇〇万円にものぼりました。

このため、九日朝に議会全員協議会を開いて現地視察、午前十一時には災害対策本部を設置。さらに、国や県の関係機関にも働きかけ、災害に対処しています。

さて、かんじんの道路を失った通勤通学者。中学生三八人は、九日は自宅待機、十日から十七日まではスクールバスで長岡経由、現在は現場の下流を徒歩で通っています。いっぽう車は、虫亀—小千谷市首沢間をう回し、不便な状態が続いています。

バスで通学する虫亀の生徒

土砂の流出防止や道路確保については早急にその対処が望まれていますが、天候や土砂の中の水などの状態により、危険性もあって、なかなか容易ではありません。

今のところ、土砂流出の防止では下流の土留めを、道路では安全を確かめたうえで、まず人道を、次に車が通れる仮設道路が検討されている状況です。

駐在だより

（長岡警察署 竹沢・種苧原・蓬平駐在所）

◎子どもの水の事故防止

○幼児の水の事故は保護者の油断から

○危険箇所には、サクとフダ

○水辺の子どもに、一声注意

◎行楽期の交通事故防止

○出発は早めに途中はゆっくりと

○あせらずに心と距離にゆとり持て

○一杯で、くるうあなたの腕とカン

◎山火事等の事故防止

○タバコの火確認するまで捨てないで

○クロ焼きは監視しながら最後まで

○タキ火の火消すまでそばを離れない

民芸品展示会から

さる四月三日、観光協会の主催で民芸品展示会が、種苧原温泉センターで開かれました。種苧原民芸品クラブの方をはじめ、見事な民芸品の出品が二百点余り。

この民芸品、以前は私たちの生活の道具として使われていたものですが、最近はその素朴な味に人気が集まっています。

作品は、長い間の技術の積み重ねで立派なものばかり。ミノ、スゲ笠、荷綱、せなこうじ、わらゾウリ、スッペなどの日常に使ったものから、角突きの面綱、さらにスゲの角突き牛、かんじきのミニチュアなどの作品も展示されていました。

現在のところ、これらの民芸品は観光開発公社と種苧原センターで販売され、好評を得ています。

これがさらに発展するよう、産業面や観光面でも期待されています。

時代に合った節約を

近火見舞い・病気見舞いのお返しの廃止

「近火見舞い・病気見舞いのお返しは、山古志全域でやめようではないか」と、今年の区長会議で話し合われた。

お互いの助け合い、それに対するお礼の気持ちで生まれたものだが、時代の流れとともに派手になりすぎた。見えやうわべが増した虚礼になっているのではないだろうか。各地区でも話し合われ廃止を決めるのだが、すぐそのきまりが破られてしまう。——そこで、山古志全体で話し合って、近火見舞いや病気見舞いのお返しをやめようというのである。

「近火見舞いも大きい部落になると百も二百も持っていく。車いっぱいに積んで、一日がかりだ」「もらったタオルがダンボールで三つ、売りでもしなくちゃどうにもならん」……火災が起こると次の日は、見舞いの人が右往左往。

いっぽう、入院した場合なども「お見舞いをもらって大変ありがたかったけど、お返しを考えるのに悩んでしまう…」「お返しがあんまり立派な物なんで、また何か持って行かなくちゃならない」。

年々派手に…

以前と違って最近は、物が豊富にあり、金さえ出せば何でも手に入る。それで「こんな物やってもかっこうがつかない」。また高度成長時代のあおりもあって「この前よりよくしなくちゃ」「あそこの家より悪くはできん」と、どんどんエスカレートする。

近火見舞いの場合、以前の手ぬぐいが「タオルやふろ敷き、新戚や知人にはそれに菓子がつく」。病気見舞いのお返しも「高価なものをもらえば、それに見合うお返しをする」「立派なお返しをされると、ヘタな見舞いはできない」と年々〝大型化〟してきた。すでに〝善意の助け合い〟〝気軽な付き合い〟のワクを超えているのではないだろうか。

もらっているから…

これまでも各地区ごとに、こういう虚礼は廃止・縮少しようと申し合わせられてきたが、大部分はすぐにもとに戻った。どうして守られないのだろうかというと「前にもらっているから、やらないと礼儀を欠く」「よその地区ではやっている。自分だけやらないというわけには……」とのこと。もちろん、申し合わせがキチンと守られてきた地区もある。

新生活運動

いま、新生活運動が繰り広げられている。この運動は低成長期を迎え〝ムダを省く〟ことを軸に、時代に合った新しい生活習慣をつくるためのもの。省資源、冠婚葬祭の見直しなど冗費を節約することは、どこの家庭でも心がけなければならない。となると、うわべだけの礼儀はやめるか本来の姿に戻って簡素化すべきだろう。これは近火見舞い・病気見舞いのお返しに限ったことではない。結婚式や葬式の方が金額も大きく、家庭に対する影響が大きい。

しかし、いくらムダを省くといっても〝助け合いの精神〟〝温かい心の通い合い〟といったことまでなくしてしまったとしたら問題だ。そのためには、家庭、地区、さらに村全体でよく話し合い、十分理解し合って、みんなで足並みをそろえて推し進めることが必要であろう。

さて、始めに述べた区長会議の話し合いで**「近火見舞いは親戚などの場合を除いて廃止。病気見舞いのお返しもいっさいやめよう」**ということでまとまった。

みんなで協力してこれを守り、さらに他のことでも話し合いの輪を広げ新しい生活を考えてみてはどうだろう。

健民健康保険

加入・脱退の届けは14日以内に

国保は、みんなで助け合って私たちの健康を守るための保険です。職場の健康保険に加入している人と生活保護を受けている人以外は、みんな国保に加入しなければなりません。

加入しないでいると、病気にかかっても保険は効かず、時には何十万円も支払うことになります。

加入・脱退する時は十四日以内に、住民課の国民健康保険窓口まで早めに届けてください。

国保に入るとき

○職場の健康保険をぬけた日

○転入してきた日（健康保険に加入していない場合）

○出産した日

○生活保護を受けなくなった日

国保をやめるとき

○職場の健康保険に入った翌日

○他の市町村に転出した翌日

○死亡した翌日

○生活保護を受けなくなった日

持ってくるもの—保険証・印鑑

消防団員表彰される

日本消防協会より精績章・勤続章

消防団員の方々は、日頃の地味な訓練を通し、火災や水害などから私たちの安全を守っています。

このたび二名の方が、消防活動の功績により日本消防協会長より表彰を受け、四月二十三日の消防団幹部会議の際に手渡されました。

◎精績章　川上　孫一（大久保）
◎勤続章（三十年）
畔上　喜一（木籠）

川上孫一さん

畔上喜一さん

なお、川上さんは第五分団長として、ますます活躍が期待されています。

新しい消防団幹部

消防団長　青木　秀敏（油夫）
消防副団長　川上　孫一（大久保）
第一分団長　樺沢　忠春（種苧原）
第一〃　石原　弥一（虫亀）
第二〃　畔上清四郎（楢木）
第四〃　高野栄次郎（桂谷）
第五〃　畔上　喜一（木籠）

ことしの区長さん

地区の代表としてお忙しい中、その方がたに、文書の配布や税金の徴収、土木関係など役場の仕事もお願いすることになりました。みなさんと役場のパイプ役となり、直接の窓口としてご協力いただくことになっています。

地区名	氏名	屋号	電話番号
種苧原	坂牧清作	坂牧屋	3010
虫亀	五十嵐俊一	九之七	2427
池谷	青木文博	岡いん	3667
楢木	畔上勝	周いむ	2658
下村	星野義雄	高田屋	2140
二丁野	星野清司	清一	2066
向田	川上毅一郎	庄兵エ	2171
間内平	高野新之亟	利いむ	2036
菖蒲	星野芳英	林蔵	2233
山中	星野清吉	長兵エ	2765
油夫	青木秀敏	権兵エ	2062
桂谷	高橋ソノ	茂ぜん	2586
梶金	関喜美雄	大家	2568
大久保	五十嵐藤一	へえ兵エじ	2614
木籠	松井甚四郎	四郎兵エ	3702
小松倉	小川金雄	金蔵	2077

消防団より

たき出しは要請があってからお願いします

〝火事！そらたき出しだ！〟いったん火災が起こると、男は火事場へ女は家の中でと、一丸となってご協力をいただき、感謝しています。

でもちょっと待ってください。今は、昔のように山坂をポンプを運んできた時代とは違います。せっかくたき出しをいただいても、食べないというケースが多いのです。また、お茶がわりのお酒も、自動車で来るために飲むことはできません。お気持ちやご協力は大変ありがたいのですが、ムダになってはもったいないことです。

そこで、今度からたき出しは、火災の状態などその時その時に応じて消防団から区長さん等に要請します。それからみなさんにお願いすることになりますので、よろしくご協力ください。

先生の移動（小・中学校）

（　）内は転任校、前任校

ごくろうさまでした

種苧原小教諭　笠井菊男（長岡・柿小）、養護助教　宗形志津子（退職）、**池谷小**教諭　関口拓男（小千谷・塩谷小）、**竹沢小**教諭　徳永浩子（小千谷・真人小）、養護助教　鈴木千恵子（退職）、主事　佐々木弘幸（同）、**東竹沢小**教諭　池田敏郎（三条・四日町小）、養護助教　鵜川菜穂子（退職）、**種苧原中**校長　金山茂（中之島北中）、教諭　渋谷武雄（豊栄・木崎中）、同　金切まゆみ（退職）、**山古志中**教頭　加藤成夫（豊栄・岡方中）、教諭　伊藤一（中条・築池中）、同　前沢保夫（長岡・南中）、同　金山慎二（同）、同　若林久実子（新潟・大江山中）、講師　目黒秀子（退職）、養護助教　渡辺節子（同）、主事　礎部和枝（同）

よろしくおねがいします

種苧原小養護助教　武藤千栄子（新採用）、**竹沢小**教諭　中村章子（小千谷小）、養護助教　西山かおる（新採用）、主事　神田春子（同）、**東竹沢小**教諭　井上タイ子（中条・築地小）、養護助教　斉藤紀子（新採用）、**種苧原中**校長　礎部和三郎（中越教育事務所）、教諭　佐瀬良政（黒崎中）、同　畠山文子（新潟・松浜中）、**山古志中**教頭　久我勇（県立青少年研修センター）、教諭　佐藤武志（十日町・水沢中）、同　馬場毅（六日町・大巻中）、同　葉葺吉弘（村松・山王中）、同　山口貴子（新採用）、講師　霜島京子（同）、養護助教　入田ヨネ子（同）、主事　渡辺満夫（同）

道路河川道路河川道路河川道路河川道路河川道路河川道路河川道路河川道路河川道路河川道路河川

道や川をきれいに

待ちに待った春が来ました。野山の木や草も生き返ったように、いっせいに芽をふき出します。——ところが、今まで雪で隠れていたゴミや空きカンが顔を出している——特に道路や川の周辺で、こんな光景が目につきます。

道路や川は村の玄関、村の顔ともいえます。ここにゴミやあきカンが捨てられていると「ゴミだらけの村」という汚名を着せられかねません。また美観上だけでなく、川の水は私たちの生活に密着しており、環境衛生、農業、養鯉などの面からも大切な資源です。

観光地で「せっかくの美しい風景の中で、ゴミやあき缶などが目について残念だった」などという声を耳にします。旅のハジはかき捨て——ひいては自分の近くでも平気でゴミを捨てるように……。村内でも、よそから車でゴミを捨てに来たという話も聞きます。ゴミが捨ててあるその上にゴミを捨てるのは、そんなに気がとがめない、とも耳にします。

さて、道路や川の美化をすすめる手だては……第一には、一人ひとりが自覚と公徳心を持ち、きちんと処理をすることが大切でしょう。処理するには、時間と労力がかかります。それではどうしたらスムーズに処理できるか考えることも必要でしょう。

そのために、地域ぐるみで話し合い、協力し合って、きれいな村にしたいものです。

山古志よもやま（124）

八犬伝とその作者

宇津の山辺にあらねども。人にはあはぬなりけりと。つちすさみつつ悔しきに。独りつくづく思ひみるに。さきにはひどく酔ひにけん。人の意見を聽かずして。かかる重擔をはるばると。もて来ぬるこそわれながら。労して功なきわざなりけれ。これよりなほも苦辛して。小千谷の宿までもてゆきぬとも。銭も縮もわがものならぬに。人もたのまぬ擔奴（荷をかつぐ男）をせしは。只これ酒の所為なれども。痴漢（ばかもの）なり。と人にいはれん。さりとて棄てはいよいよいなれず。益なかりき。と独りごちて。舌うち鳴らす後悔の。今さらここに立つよしなければ。思ひかへしつもたげ起して。肩に載せんとせしおりから。たちまち婦人の叫ぶ声して。やよ嘩わらわ（妾）を助けてたびね。助け給へと呼かけたり。その時磯九郎は。思ひがけなきよび声に。おどろきつかつ怪しみて。急にあたりを見かへども。それかと思ふ人影もあらず。さてはこれは狐狸の。今わが疲労れて悔しく思ふ。心の空虚につけ入りて。たぶらかさんとなすにやあらん。いと嗚呼なり。とののしりて祖おしいれついそがはしく。眉毛にしばしば唾を塗りて。ふたたびあふこ（初）に手を掛つつ。とく攫げんする程に。またまた呼ぶ声しきりに起りて。助け給へとさけびしかば。磯九郎はいよいよいますます。うたがいまどふて去も得やらず。くまなき月を燭（ともしび）にして。なほあちこちと看めぐらすに。声はまさしく樹の下なる。残雪（のこんのゆき）のほとりにて。その人土中にあるかとおぼしく。形状はなほも見えざりけり。ここにつらつらしあん（尋思）をなすに。こは北国の習俗にて。冬春雪の深かるころ。かりびとらが雪をうがちて。あな蔵の如くにしつ。その雪あなにかくれいて。鳥をとることつねにあり。今は四月の初旬にて。里なる雪は消え果たれども。日光にうとき巨樹のもと。薮蔭などにはなほ雪の。小山のごとく残れるあり。かかれば那里はちかきころまで。鳥を捕るもののうがちなしたる。雪あなにもやあらんずらん。さらば夜みちをせしものの。